

~ 5
6709



木の原 何方 江の東 山は
一 秩 お 舟 へ 早 垂
り 上 へ の せ り へ へ へ

山部氏

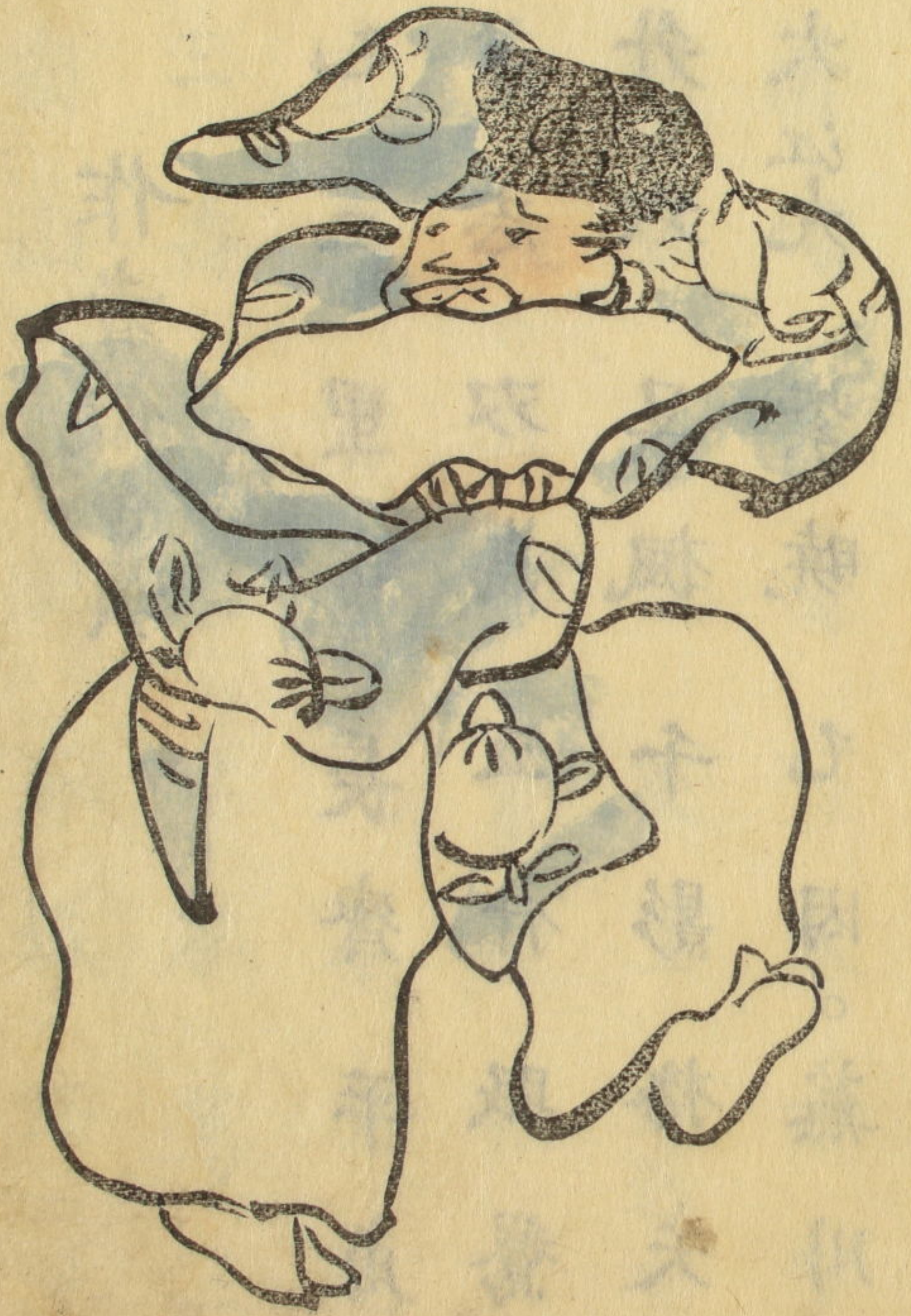


寛文之徳萬歳者雖産親重入道之
著也也亦寛政庚申春三寸造燕市編
賀帖而俱諷徳萬歳盖集一曲昇平人
者是即野店之正月也
不聲

築北英親

卷中目録

芳中寫之



作者微句順

八	大	升	筵	乙
風	江	六	志	二
吾	九	吳	双	里
明	紫	楓	烏	由
雲	曉	千	五	長
帶	乙	影	什	齊
臥	因	梅	眠	平
梅	。 蒸	夫	鶯	角
	川			

南	三	李	吾	波	井	午
山	壽	喬	長	万	疇	心
青	蜂	有	。 杜	藻	岱	青
楓	二	麥	厚	臺	青	花
春	巨	尤	素	鶯	可	東
蟻	苓	阜	鄉	里	來	踞
歸	葛	文	猿	可	方	一
童	三	兆	左	都	中	草
				里		

自樂五明東子。琴臺
竹冠空阿益雄寸來
希言芳志心匪吐牛
國村三巴道彥斗入
巢兆瓦全渭虹素檠
珍羅。魯隱重厚管菴
廉々且且文卿春鴻

吾周分字路川柴路
觀里柳莊滋徑金翠
凡化和調吳山

都八十余人

成美完來呂蛤猿子
文蘭范庐夫山豆箕

白麻二童曉桂其黑
語竹如蘭菊明。里江
一雨秋夫不逮雨塘
春魯一蕙冥々蛙眼
宜麥花藍辟人虎杖
荒河野旋雲蘿蓼翠
燕市。大呂兀雨阿陵

佳笑佐耕長翠車兩
喜川宜召作笠素十
百露碩布喬駟魯鄉
尚達祐昌律大。柳翠
常南麥字路人彥貫
路竹榮市時雨鳧丈龙
峯鳥成雅瑞馬素尺

栢翠 野杏 蕉雨 春坡
棗螿。調々 一董 千車
士朗 莫二 古梁 艸司

都七十余人

荒陽酒肆燕市小夫集之

名客の集の大例

今... 名客の集の大例... 荒陽酒肆燕市小夫集之... 都七十余人... 栢翠 野杏 蕉雨 春坡 棗螿。調々 一董 千車 士朗 莫二 古梁 艸司

人あやとわびなく柳莊梅園の歌ハ雅も
大金持おふ事とれもふさく一士朗ハ此乃
美一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
徳元ハ家のしきりハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
酒ハ母ハ人ハもまハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
思ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
柳句作ハ集編のあ侍ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ

多ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
引ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
句撰ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
おハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
醫ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
あハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
はハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ
的ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ一ハ二ハ三ハ四ハ五ハ六ハ七ハ八ハ九ハ

けしきし陣とるしんりまの菴
 雲や雲しんりまの菴
 うまふしんりまの菴
 席なやねるしんりまの菴
 有るしんりまの菴
 春の物しんりまの菴
 るしんりまの菴
 日しんりまの菴
 庭の松しんりまの菴

みしんりまの菴
 雲や雲しんりまの菴
 うまふしんりまの菴
 席なやねるしんりまの菴
 有るしんりまの菴
 春の物しんりまの菴
 るしんりまの菴
 日しんりまの菴
 庭の松しんりまの菴

八月の御書に言はれりて花の梅
 冬はらや雀のささる牛の甲
 甲のささる雀のささる梅の根
 乙のささる雀のささる梅の根
 丙のささる雀のささる梅の根
 丁のささる雀のささる梅の根
 戊のささる雀のささる梅の根
 己のささる雀のささる梅の根
 庚のささる雀のささる梅の根
 辛のささる雀のささる梅の根
 壬のささる雀のささる梅の根
 癸のささる雀のささる梅の根

梅のささる雀のささる梅の根
 雀のささる梅のささる梅の根
 梅のささる雀のささる梅の根
 雀のささる梅のささる梅の根
 梅のささる雀のささる梅の根
 雀のささる梅のささる梅の根
 梅のささる雀のささる梅の根
 雀のささる梅のささる梅の根
 梅のささる雀のささる梅の根
 雀のささる梅のささる梅の根
 梅のささる雀のささる梅の根
 雀のささる梅のささる梅の根

首目枯くはしむるに極くは
 志らむるにふらふに往く
 胸懐中へいふの有り父に
 楠宮のありしははははは
 枯枯くはしむるに極くは
 後着く時ゆきて事かも
 ちるに極くはしむるに極くは
 菅原のありしははははは
 馬の尾に極くはしむるに極くは

系七の厨に極くはしむるに極くは
 山石の影に極くはしむるに極くは
 廿一人の松の葉に極くはしむるに極くは
 水仙の影に極くはしむるに極くは
 大空の白く極くはしむるに極くは
 思ふに極くはしむるに極くは
 なるに極くはしむるに極くは
 少くも極くはしむるに極くは

あつさるゝ中 雛よれ入らり ちかひか
初雛や 行かぬ中 雪東のつらぬ取
ちのちや 宇治の小糸師の 福全
初や 梅の 龍波の ぎし 阿しよ
おしし ちか 龜田の 祿宣の ちか ちか
ちかの 初灯 ちか ちか ちか ちか
ちかの ちか 娘 眉と ちか 天社日
山軍や ちか ちかの ちか ちか 門
ちか ちか ちかの ちか ちかの ちか

ちか ちか ちかの ちか ちかの ちか
佛あ とし ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか ちか ちか

橋のわたりにてはるるのうらみ
 深のくはぬきぬきとてはるる
 降のふりやあけのけしき
 旅路のたふし踏むはるる
 我の心やあはれとてはるる
 蝶の舞やあはれとてはるる
 大雪のふりやあけのけしき
 松の影のたふし踏むはるる

さくら

十の月さくら花のうらみ
 深のくはぬきぬきとてはるる
 降のふりやあけのけしき
 旅路のたふし踏むはるる
 我の心やあはれとてはるる
 蝶の舞やあはれとてはるる
 大雪のふりやあけのけしき
 松の影のたふし踏むはるる

海苔を食すにまじりて馬を食む後(1)の如
 山人を食すにまじりて馬を食む(2)の如
 ほ新中(3)の代(4)の松(5)
 打中の後(6)の松(7)の松(8)
 此(9)の何(10)の松(11)の松(12)
 丘(13)の松(14)の松(15)
 何(16)の松(17)の松(18)
 鴨(19)の松(20)の松(21)
 之(22)の松(23)の松(24)

多(25)の松(26)の松(27)
 多(28)の松(29)の松(30)
 多(31)の松(32)の松(33)
 多(34)の松(35)の松(36)
 多(37)の松(38)の松(39)
 多(40)の松(41)の松(42)
 多(43)の松(44)の松(45)
 多(46)の松(47)の松(48)
 多(49)の松(50)の松(51)
 多(52)の松(53)の松(54)
 多(55)の松(56)の松(57)
 多(58)の松(59)の松(60)

四阿に下懸りのさしをまき 梅の徳をれ
 おのろり白くさしをまき けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり

世にまきけりあまきり けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり
 保のしとにさしをまき けりあまきり
 ぬるあやさしをまき けりあまきり

川合の家の前を流るる水の音
橋を渡る人の足音の響
夕陽の影を長く伸ばす
空の雲が白く染まる
水は清く流れてゆく
舟の櫂が水を切る音
山は遠くに見えぬ
心は静かに沈んでゆく

舟の櫂が水を切る音
山は遠くに見えぬ
心は静かに沈んでゆく
水は清く流れてゆく
舟の櫂が水を切る音
山は遠くに見えぬ
心は静かに沈んでゆく
水は清く流れてゆく

関屋文基呈聞

鬼子に誅しよる者ハナク壽 三壽

物も海らうる者ハナク壽 巢兆

旅ハナク車の子給よ海ハナク 燕市

連衆萬々歳

寛政十二年庚申正月吉辰

東都台嶺下 江川左衛門壽梓

六十七

漢書
卷之九